

対馬歴史民俗資料館報

第 20 号
平成 9 年 3 月 25 日

編集・発行
長崎県立対馬歴史民俗資料館
対馬厳原町今屋敷
郵便番号 817
電話 (09205) 2-3687
印刷所
長崎市栄町 6-23
昭和堂印刷
電話 (0958) 21-1234

渡海譯官並從者姓名

「渡海譯官並從者姓名」(表紙) (墨付 5 丁、〈縦〉 29.2× 〈横〉 31.2cm)



対馬が初めて文献の上で紹介されるのは、中国の歴史書『三国志・魏志』東夷伝「倭人の条」、いわゆる、「魏志倭人伝」で、「対馬は絶島で人々は海産物を食べ南北に商いをして暮している」という箇所である。時代は三世紀、日本は、弥生時代の後期を迎えたころのことである。

ここにいう南北の「南」は北九州、「北」は朝鮮半島と考えられているが、以来、「対馬の歴史」は、朝鮮半島との交流の歴史であった、と言っても過言ではないと思う。

もっとも、実際には、弥生時代以前、縄文時代の早い時期から、朝鮮との往来があったことは、島内の複数の遺跡から出土する半島系の土器の存在によって明らかなどころである。

さて、時代は降って古代、中世を経て近世にはいり、江戸時代、日本は、オランダや中国など一部の国を除いて外国に対して国交を閉

対馬の歴史と宗家文庫史料

中村仁志
館長 本人―実はほとんどが対馬の人たちがいて、貿易などに従事していた。

国内でも、まとまった藩政史料である宗家文庫史料の中には、これら朝鮮との交流に関する史料が含まれており、近世日朝関係史の研究上大変貴重な史料である。

旧対馬藩で記録された宗家文庫史料は、江戸時代約二百五十年間に、幾多の先人たちが、毎日記録を積み重ねることによって築かれ、今日に引き継がれてきたものである。それが、明治維新後、何度かにわたって国内外に分散所蔵されることになった現在、せめて本館架蔵分は永久に対馬に残るようお願いしたいものである。

一、訳官使の対馬来島

豊臣秀吉による朝鮮出兵(一五九二)後の関係修復に努力し、幕藩体制下に入った日本と後期朝鮮王朝は、徳川幕府歴代の親善外交のもと、極めて平和的な友好関係を保ちながら推移し、やがて日本は、風雲急を告げる幕末を経て、明治維新を迎えた。日本は、この徳川幕府が外国に対して国を閉ざしている間も完全な意味での、鎖国政策をとっていたのではなく、朝鮮国とは、国交関係が保たれたまま近代に至った。そして、その間、両国の外交業務の一切をとりしきり、両国間で華やかな貿易活動と、文化の交流活動を展開してきたのが対馬藩であった。

江戸時代、十二回にわたって来朝した朝鮮通信使は、来日する朝鮮人の人数、要する日数、経費ともに大がかりで、最も派手な使節団であった。

一方、この華やかな通信使とは別に対馬にやってきた、やや規模の小さな朝鮮からの使節団があった。訳官使である。訳官使の来島の目的は、

見発の簿名姓使官難遭沖浦鰐

一 「渡海譯官並從者姓名」、元禄十六年一

- (1) 信使来朝に際しての諸問題の協議等外交上の実務に関するもの
 - (2) 徳川家の慶弔に関するもの
 - (3) 宗氏の慶弔に関するもの
- などが、その主なものであった。

助 勝 松 小 芸 学

江戸時代における訳官の来島は、寛永六年(六二九)から幕末までおよぶが、一番回数が多かったのは、朝鮮貿易の利益によって対馬藩の財政がもつとも潤った宗義真第三代の時代(一七五七)であった。

ここでは、比較的早い時期、江戸時代初めの寛文四年(二六六)に来島した訳官一行の対馬上陸から離島までの約四十日間の様子を、藩の毎日記に誌されている簡単な記録によって、その概要をみておくことにする。

この年、参勤交替により江戸に上っていた義真の帰国(五月二十三日)を祝うため、訳官一行(七十二名)が、対馬に到着したの

は、去ル十八日、訳官鰐浦着船之由申来ル、

(「表書札方毎日記」寛文四年十一月廿日条)とあるように、十一月十八日のことであった。その一行が、航海中、(かじ)船ばりを損じたため、西泊浦で船拵

え(修理)し府内に着いたのは、四日のちの十一月二十二日、昼八ツ上刻(午後二時ころ)で、その一時間後、宿寺の西山寺に入った。そして、この日は「訳官落着之御振廻」のため、「御城料理が仕立」られ、宿へ届けられた(同日記、同日条)。

登城の日程については、「来ル廿八日ニ訳官登城候様ニ」計画され、使者の杉村三郎左衛門が、訳官宿に出向き都合を伺うと、ちょうどその日は「朝鮮国の忌日」に当たっているので日延べしてほしい旨の依頼があり、結局、来十二月朔日に予定されることになった。

城では、訳官を迎える日の前日に「広間之御座所之武具等飾」なりつけもして当日を待った。当日は訳官が「今日初て御対顔」のため登城するといふので、その日の当番侍はもとより、非番の者も招集された。そして、一定の仕来りに則って御対面の儀式が執り行われる。この時の役人の出で立ちには、馬廻格は長袴、大小姓・歩行侍は、中袴上下を身につけ、決められた座につく。この時は以酹庵の輪番僧、長寿院の和尚も列座している。儀式の詳細は、全て別仕立ての「訳官渡海記三有之」とあって日記には極めて簡単に項目のみしか出てこないが、基本的には、次のような流れであったと思われる。

- (1) 冠服を付けた訳官より、朝鮮礼曹からの書簡の受け渡し

- (2) 藩主の襲封・帰国等の祝
- (3) 藩主または將軍の死没の弔 (2)(3)は一定の口上あり
- (4) 奥書院に用意されたお膳の振舞 (初献・三献まで)
- (5) 料理後、菓子と茶をいただく

この日、訳官一行は未ノ刻(午後一時頃)登城し、約三時間滞在したあと戌之刻(午後四時頃)下城した。

この後、十二月七日には、訳官のためお城において、「中宴席」が設けられ、町おどりも披露された。この日、訳官は、巳ノ刻(午前十一時半)登城し、昼食をはさんで踊りの見物に興じた。上官は墨絵の間広縁より、小童・中官は同檜縁より、下官は、「庭ニ席敷並居候」ところから、それぞれ見物した。踊りの場所はおそらく庭であろうが、踊りがどのような踊りであったかについては誌すところがない。

こうして、一行が約四十日間の滞在を終え、「帰国之返翰」を携え、対馬を後にしたのは、大晦日の十二月廿九日のことであった。

註

- (1) 荒野泰典編「対馬藩の日朝外交業務等一覽表」(田中健夫編「前近代対外関係史の総合的研究」一〇九ページ)
- (2) 「庚申訳使渡茶礼之式」(以下宗家文庫史料)
- (3) 「表書札方毎日記」寛文四年十二月朔日条
- (4) 同日記、同年十二月廿七日条
- (5) 同日記、同年十二月廿九日条

二、訳官使の遭難事故

後期朝鮮王朝が、江戸時代対馬に送った公式の使節訳官使は、通常六十数人〜七八十人前後の使節団で、百人を超えることは、数回しかなかった。そういう中であって、それまで最多の百八人の大使節団を構成し対馬に向かった一行が、僅か二里の陸地を目前に、百八人全員が遭難するという痛ましい事故が起こった。

元禄十六年(朝鮮肅宗二十九癸未、一七〇三)二月五日(新曆四月二十一日)、鰐浦沖で



「毎日記」史料文庫家宗を伝えるを船難訳官 (元禄十六年二月七日条)

すなわち、対馬藩主宗義方(第五代)の襲封慶賀と前年八月七日に死去した宗義真(第三代)を用う朝鮮国訳官使一向百八名がこの日の朝、中西風(北西風)の中を船出し、裁判役・山川作左衛門の先導のもとに、予定どおり、順調に対馬の鰐浦沖(上対馬町)へさしかかったのは、八ツ過(午後一時〜一時半頃)ごろで、事故が起こったのは、鰐浦沖浅瀬が広がる航行の難所「はえのは」であった。

え、飛脚として、現地より藩庁に差し登った。すなわち、

佐護郷給人 福嶋九兵衛
右は、佐須奈御横目中より状箱持参、御年寄中江差上ル、

〔表書札方毎日記〕

元禄十六年二月七日条

そして、九兵衛自身も阿鼻叫喚のこの模様を次のように報告した。

訳官百八人乗一艘、裁判山川作左衛門乗船引船一艘去ル五日、朝は中西風ニ而朝鮮出帆仕候処、昼時強風、沖南風ニ成大風波高ク、八ツ過

沖西風強ク吹、其節、作左衛門乗船佐須奈二里程之所江乗掛候節訳官船おくれ居候付、作左衛門乗船帆を待合候得共、次第ニ風強成候故、作左衛門乗船引船は、大浦江乗込申候、訳官乗船二里余程之所、はえのはの方へ寄添相見へ候処、帆を下、暫は船見へ候得共、其以後は船も相見江不申候、御横目中并豊崎

・佐護両郷之人數寄合、漕船等之下知仕候得共、浦口迄も押出候儀、曾不能成大風ニ而御座候、某儀も役目ニ而御閑所江罷越居見及承及候段、右之通ニ御座候、

九兵衛が述べる口上の要点は、
① 朝、朝鮮を船出する時は北西だ

② 朝、朝鮮を船出する時は北西だ
となると強まるとともに、沖は南風になり、波も高くなつた。

③ 帆を下げた訳官船は、しばらくの間は沖二里付近にいたが、その後、姿は見えなくなった。

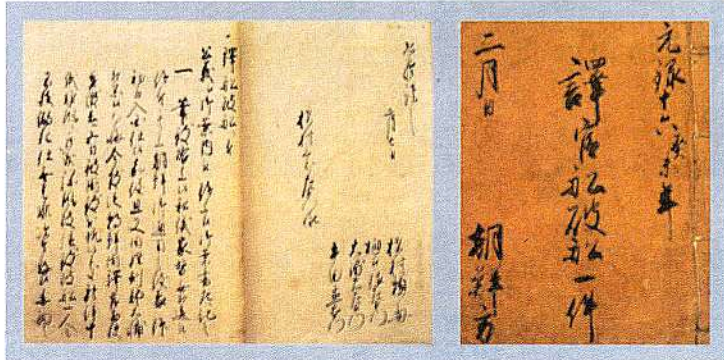
④ 人はそろつたものの、救助船は強風のため、浦口迄さえも漕ぎ出すことはできなかった。

⑤ 自分は役目から、閑所にいてこの現場を目撃した。

訳官船は、急速に発達した低気圧の発生または接近により急変した荒天の中、陸まで僅か八〜九キロの「はえのは」の浅瀬で座礁し、難破した。早春の「春一番」に代表される突如の暴風発生という、牙をむいた大自然の驚異をまざまざと見せつけられた一大海難事故であった。

「同日記、同日条」
鳴江「打ち寄せてくるので、「破船仕候」紛」ないことを確認し、藩は、江戸幕府への報告に田城沢右衛門を立てる一方、平戸、筑前、長崎、長門、岩見など近隣諸国に飛脚を遣わし遺体漂着の確認調査に乗り出したが(同毎日記同日条、結局、遺体は、うに鳴、三ツ嶋、豊浦など近くの浜辺からだけしか発見されず、その数も僅かに十二体を数えるにすぎなかった。さて、これほど大きな海難事故でありながら、これまで遭難者の名前が記載された文書に、最近宗家文書の中に遭難者全員の姓名が誌された記録があることがわかったので(佐伯弘次氏のご教示による)、報告することにした。

なお、本海難事故に関する論考として、次の二編がある。
①阿比留嘉博「朝鮮訳官遭難事件」(『文明のク』
ロズロード・Museum Kyusyu 第一三三号)
昭和五九年
②斎藤弘征「朝鮮國譯官船鰐浦沖破船をめぐって」
平成三年



「譯官船破船一件」(韓国・国史編纂委員会所蔵、図録「朝鮮後期通通信使と韓日交流史料展」より転載)

〔表紙題〕
 三、「渡海譯官並從者姓名」
 (内題「癸未三月 日 渡海滄屍各人等姓名」)

凡例
 ①翻刻にあたり、便宜上姓名の上部に通し番号を付した
 ②正確を期するため、異体字、難解な文字は影印にした。

癸未三月 日 渡海滄屍各人等姓名寫
 朝鮮國奉 命問慰譯使嘉義大夫行 龍驤衛副護軍韓公之靈 諱天錫
 (1) 韓公 諱天錫
 朝鮮國奉 命問慰譯使通訓大夫前 僉正朴公之靈 諱世亮
 (2) 朴公 諱世亮

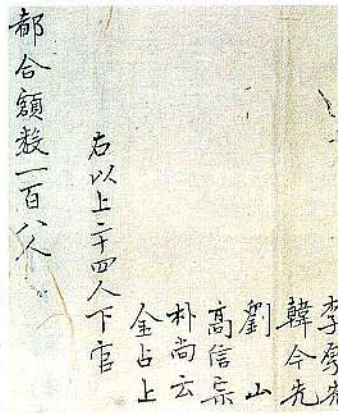
22 張公 諱鳳一
 21 李公 諱尚白
 20 石公 諱萬重
 19 金公 諱之幹
 18 朱公 諱斗安
 17 黄区 諱遇清
 16 柳公 諱青輝
 15 李公 諱再輝
 14 徐公 諱後成
 13 李公 諱英實
 12 金公 諱就鉉
 11 徐公 諱奎齡
 10 崔公 諱連祥
 9 諱公 諱國翰
 8 金区 諱單
 7 姜公 諱遇周
 6 崔公 諱愛祥
 5 金公 諱軟鳴
 4 柳公 諱致賢
 3 張公 諱後永
 (2) 朴公 諱世亮

右以上貳拾捌人上上官

23 鄭公 諱正佑
 24 趙公 諱涓漢
 25 白公 諱時萬
 26 金公 諱載興
 27 韓公 諱岌
 28 尹公 諱必耆
 29 朴公 諱世曼
 30 金公 諱益只

31 鄭某男
 32 魚重川
 33 李貴善
 34 朴成俊
 35 林允男
 36 金次男
 37 金承敏
 38 權仇里金
 39 朴有文
 40 閔武蕪
 41 姜貴同
 42 吳介也之
 43 瘕險扎
 44 尹碩萬
 45 丁夷生
 46 李貴奉
 47 李振永
 48 金時興
 49 朴 璩
 50 李善雄
 51 黃非見
 52 朴世文
 53 成建
 54 貴奉
 55 惡孫
 56 鋤乙同
 57 慶齋

「渡海譯官並從者姓名」(部分)



71 李厚先
 70 崔連日
 69 張仁白
 68 孔有白
 67 李 碩
 66 金時旭
 65 金起福
 64 吳龍男
 63 黃承天
 62 李時成
 61 方一龍
 60 朴命元
 59 金戒天
 58 者斤同

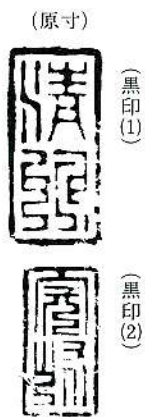
72 金貴昌
 73 侍只
 74 金戒惡
 75 金光立
 76 金土龍
 77 鄭武致
 78 金守永
 79 李時萬
 80 朴順良
 81 朴平建
 82 柳成萬
 83 金天日
 84 金愛先

右以上五十四人中官

右以上二十四人下官

都合額數一百八人
 癸未六月 日

訓導韓僉知 (黒印(1))
 別差鄭判事 (黒印(2))



85 金堯金
 86 張於九
 87 愛孫
 88 姜萬生
 89 李三龍
 90 李 發
 91 姜名伊
 92 金夢建
 93 金日先
 94 李哲生
 95 金賢迪
 96 李永善
 97 金貴男
 98 李思信
 99 金於九
 100 金白仁
 101 尹仁發
 102 瘕石碧
 103 李厚先
 104 韓今先
 105 劉 山
 106 高信系
 107 朴尚云
 108 金占上

府中湊の『やらい』の構築

学芸専門員 長郷直明

宗氏は鎌倉時代の中頃から明治維新の版籍奉還まで一貫して対馬を統治した。そして十五世紀末から府中が宗氏の対馬統治の拠点となった。

府中は宗義真の寛文期から城下町として急速に発展し、多くの武士が屋敷を構え居住した。また多くの商人や職人が店舗を構え、商いをおこなった。このように、府中は多数の人々や物資が集中し賑わった。

陶山訥庵の「口上覚書上巻」によれば、延宝八年(二六八〇)の対馬の人口は三万一一七四名とあり、そのうち府中には、一万四七七二名の人々が居住していた(陶山鈍翁遺著「六五頁」)。府中は、対馬の政治、経済、文化の中心地として繁栄した。その府中は対馬の南部に位置し、何よりも博多や長崎に近く交通に便利であった。宗氏が中世から府中に館を構え、対馬統治の拠点とし、繁栄したのもそのためであろう。城下町府中の玄関口府中湊は、東方の野良崎、南方の虎崎に囲まれ、対馬の東海岸随一の良港であった。しかし、湊口が広く入港した船が安全に係留することができず船だまりがなかった。

宗義真が在位した寛文期は、諸改革の成功、順調な朝鮮貿易や銀山経

営等により財政は豊かになり、藩は全盛期を迎えた。義真はその財力を用い、お船江の築造、大船越瀬戸の堀切等多くの土木事業を実施した。また、この頃

になると島内や九州それに朝鮮国との交流が盛んになり、府中湊には多数の船が入り出した。そこで府中湊の整備が必要になり、義真はやらいの建設工事に着手した。しかし、海水の干満、波浪などを考慮しなければならず、大変な工事であったろう。

やらい建設の大工事は、寛文二年(二六六二)に始まった。宗家文庫史料『毎日記』に「浜やらい普請、八郡廿人、歩之者十五人宛二面」(同年三月二十三日条)とあるように、作業人は、対馬の八郡と府中から集めて行われた。「やらいのがんぎ大波にて少損し候由」(同日記寛文四年七月八日条)とあり、工事半ばでやらいの石垣積みが大波で破壊されたこともあった。義真はそんな中でやらい建設事業を継続した。時には困難な工事に従事していた人々の労をねぎらうため報償を与えた。また、工事現場の中心人物と考えられる長崎市左衛門が長期間やらい工事に従事し、長年苦勞したこと等も記されている。すなわち、

やらい之普請仕候夫之者中へ銀
苞枚、同長崎市左衛門、木綿志足
被下ル、是、やらい御普請永、苦勞
仕候ニ付如此也、

(寛文五年十月二十一日条)
宗義真は、寛文七年(二六六七)、幕府の諸国巡見使が、来島する機会に本格的なやらい建設を実行した。

『毎日記』の同年閏二月十七日条に「やらい普請奉行糸瀬千右衛門被仰付候」。「御国廻り御上使ニ付、浜之やらい普請御急ニ付被成候付、御下屋敷御普請奉行へ、先留置候様ニと田井格左衛門ニ申付ル、尤格左衛門儀、浜之やらい普請奉行相加り申様被申付ル」とある。この事業は緊急で本格的なやらい工事である。そのため、棧原屋形の普請奉行をやらい普請奉行に任命し、普請奉行を二名体制にするようになった。さらに、同年六月二日条には「浜之やらい普請被仰付置候田井格左衛門、やらい普請之者召連出、破損掛りは日用之者召連出、町人馬方之下知人は、早田甚兵衛、江崎十左衛門ニ申付」とある。やらい普請奉行はやらい作業人、破損修理係は日雇い人、早田と江崎の両人は町人や馬方たちを指揮した。藩は総力を上げてやらい建設工事をおこなったのである。

寛文十年(二六七〇)十月廿九日には「やらい普請奉行被仰付置候面ニ、御褒美被成下候、則与頭内野弾之允を以右之面へ申渡候」とあるように、義真はやらい工事責任者の普請奉行達に対し報償を与えていた。寛文二年頃から継続してきたやらい建設工事は、同十年の十月末頃

にはほぼ完成したと考えられる。

『津島紀事上巻』には、府中湊のやらいについて、「外隄長三十間餘、濶サ四間高二間半、内隄長七十間、濶高外ニ同、後又東ニ一隄ヲ築、長十六間、濶三間三尺、俗之ヲ内耶良團ト曰故、内隄ヲ指テ呼テ中カ耶良團ト曰」とあり(鈴木棠三編同書二一六頁、完成したやらいは、外・中・内の三つであった。現在、韓国にある「対馬府中湊絵図」に描かれている三つのやらいをみると、外やらいだけが西の浜の番所前から東の浜方向へ伸びて陸続きになっている。朝日新聞社編「宗家記録と朝鮮通信使展七八頁。内やらいは、金石川と市の川の合流する河口先に建設されている。その間に、一番長く大規模な中やらいがある。そして、外やらいの内側には石垣段階の荷揚場や朝鮮通信使等の上陸場がある。

やらいの完成は、対馬藩の政治、経済、文化さらには朝鮮国との交流に大きく寄与することになった。三百年間の長きにわたって巖原港内に残っていたやらいであったが、昭和四十五年(一九七〇)港湾改良工事によって全部埋め立てられた。現在の跡は海運会社・荷揚場・道路等となり、残念ながら全容をみることはできない。ただ、西の浜で漁船に係留してある船だまりや、僅かな石垣積み当時の面影の一部をみることもできるのみである。

本館入館者の概要

本館を訪れる人々には、概ね二つのタイプがあるようにある。一点一点資料を入念に見学する史跡探訪型と、短時間でサッサッと見て退館する、いわゆる観光型とに大別できる。前者は、単独または小グループの入館者が多く、展示物を始め、島内の史跡等についても関心が高く、展示物も丹念に観察し確かめていく。後者は、ガイドつきの団体で十五〜二十分程度で退館していく。大学等からの研究入館者は年間を通じて絶えない。本館の所蔵資料が学術研究に大いに役立つという証である。

地域別入館者 (平成8年4月～平成9年2月)

Table with 3 columns: 地域 (Region), 入館者数 (Number of visitors), 備考 (Remarks). Rows include 九州, 中国・関西, 関東・中部, 東北・北海道, 外島, and 計 (Total).

平成八年四月〜同九年二月までの入館者数は一万四千人を越え、過去最多の数値を示している。関西方面は旅行業者の斡旋による団体である。島内小中学校は、社会科見学で、小学校七校、中学校一

校あり、韓国より小学生五十八人、中学生百五十人、高校生二十七人の来館もあった。

月別入館者・団体

Table with 3 columns: 月 (Month), 入館者数 (Number of visitors), 団体 (Group). Rows for months 4 through 2, and a total row (計).

団体入館者は、だいたい五月、七月、十月に多く、季節との関連が深い。複数入館者の同伴は、夫婦や友人同士、家族連れなど二〜三人グループの入館が多数を占める。

月平均の入館者数は千二百七十四人で、年度末における入館者の合計は一万五千人を越える勢いである。大阪直行便の開設でコース変更も見られる。

旅程表 (代表的なもの)

Table with 2 columns: 行程 (Itinerary), 備考 (Remarks). Rows show routes like 大阪→福岡→対馬→福岡 and 岡山→福岡→対馬→福岡.

対馬は通過地として、泊なしの団体もある。対馬観光は下県地区だけが多い。

団体入館者の場合には、参考のために、その旅行日程表のコピーを出してもらっているが、本館の呼称については、一定ではない。この呼称がまちまちなのは、「厳原町資料館」

との混同もあるものと思われる。しかし、それにしても、「長崎県立対馬歴史民俗資料館」と正式名称を明記した旅行会社はない。資料を新たに印刷し替える時は正式名称にしてほしいと頼んでいるところである。

三

近年、情報過多の生活に慣れていけるせいか、入館者の中にも、掲示物に目をやらず、無頓着な人が増えているような気がする。たとえば、窓口、「入館料はいりません」と掲げても、財布を開けて、「いくらですか」と問う人があるかと思えば、撮影禁止の表示も見えないのかパチッとやり始める人もある。

また、人の気配を感じ、ふと顔をあげると、物音もたてずに、そっと窓口に近づき、無言で入館者名簿に名前を記入している人も結構多い。よほど挨拶が苦手な人と思われるがよその家に入って来るのだから、何かひとこと、挨拶が言えないものかとも思うが、気をとりなしておして、事務室の方から「こんにちは」と声をかける。たしかに「こんにちは」は返ってくるのだが…。

ごくたまに、折目正しく「こんにちは」に入館し、「ありがとうございます。ありがとうございました」で退館して行く人もある。さて、当方はいえ、本館の使命に思いをはせ、入館者を暖かく迎えるそのニーズに応えるべく、邁進努力しなければと… (松島庄三郎)

短 通

(1) 保存と活用は、互いに相反する作用で、特に古文書・絵図面などの原史料の場合その兼ね合いが難しい。すなわち、なるべく長期間にわたって広く一般に公開し、できるだけ多くの人に見てもらいたい気持ちとこれを褪色、破損することなく、できるだけ遠い将来にわたって後輩・子孫に伝えなければならぬ、という責務と、常にこの二つのバランスを考慮しながら判断するのは、他ならぬ学芸員でなければならぬ。ご理解を願いたい。

(2) もともと、収蔵を目的に開館した本館(歴史資料、民俗資料などの収集、保管、調査及び研究)―「長崎県教育機関の組織及び運営に関する規則」第五条は、資料館でありながら、今時代の要求もあって、展示(博物館法にいう、教育普及の重要な機能である「展示」)にも力が入れられることになった。ここでも、展示の全責任を負う学芸員は、改めてその任務の重要性が問われることになる。

(3) この度、膨大な経費が投じられて成った恒温恒湿保持の空調施設が、史料の保存に果たす役割は大きく、館一十年の歴史の中でも特筆されるべき事業であった。

(4) オリジナル史料の保護で、重要な施策の一つに、文書のマイクロ化があるが、これが軌道にのりつつある現在、裏打ち補修のアシスタント二名増員と併せ、当局の御尽力の程を多としたい。

平成八年度職員

- 館長(兼務) 中村仁志 学芸専門員 長郷直明
課長(同) 永留保幸 研究員 藤崎利明
主事(同) 田中直文 同 松島庄三郎
課長(学芸員) 小松勝助 事務嘱託 椎葉徳子
他一名